

# 無機化学

2015年4月～2015年8月

水曜日4時間目116M講義室  
第5回 5月20日

並進運動:箱の中の粒子, 振動運動:調和振動子,  
回転運動:球面調和関数

担当教員:福井大学大学院工学研究科生物応用化学専攻

前田史郎

E-mail:smaeda@u-fukui.ac.jp

URL:<http://acbio2.acbio.u-fukui.ac.jp/phychem/maeda/kougi>

教科書:アトキンス物理化学(第8版)、東京化学同人

主に8・9章を解説するとともに10章・11章・12章を概要する

1

5月13日の解答例

279

自習問題8・5  $\cos ax$ は, (a)  $d/dx$ , (b)  $d^2/dx^2$ の固有関数か?

$$(a) \frac{d}{dx}(\cos ax) = -a \sin ax$$

$\cos ax$ は,  $d/dx$ の固有関数ではない。

$$(b) \frac{d^2}{dx^2}(\cos ax) = -a \frac{d}{dx}(\sin ax) = -a^2(\cos ax)$$

$\cos ax$ は,  $d^2/dx^2$ の固有関数である。

固有値は $-a^2$ である。

2

## 授業内容

1. 量子化学とは・量子力学の起源
2. 古典力学の破綻：波と粒子の二重性・熱容量
3. シュレディンガー方程式・波動関数のボルンの解釈
4. 量子力学の基本原則・並進運動：箱の中の粒子
5. 振動運動：調和振動子・回転運動：球面調和関数
6. 角運動量とスピン・水素原子の構造と原子スペクトル
7. 多電子原子の構造・典型元素と遷移元素
8. 異核二原子分子・種々の化学結合：共有結合・原子価結合と分子軌道法
9. 種々の化学結合：イオン結合・配位結合・金属結合
10. 分子の対称性（1）対称操作と対称要素
11. 分子の対称性（2）分子の対称による分類・構造異性と立体異性
12. 配位化合物の異性体：構造異性と立体異性
13. 結晶構造（1）7晶系とブラベ格子・ミラー指数
14. 結晶構造（2）種々の結晶格子・X線回折・ブラッグの法則
15. 分子性固体・セラミックス・ガラス
16. 期末試験

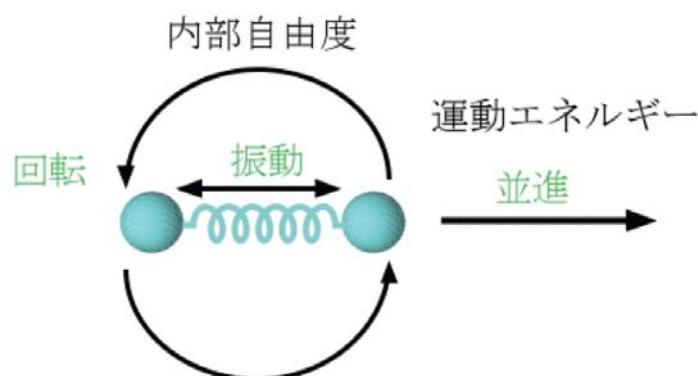
3

286

## 9章 量子論：手法と応用

量子力学にしたがって系の性質を見出すためには、その目的にかなったシュレディンガー方程式を解く必要がある。

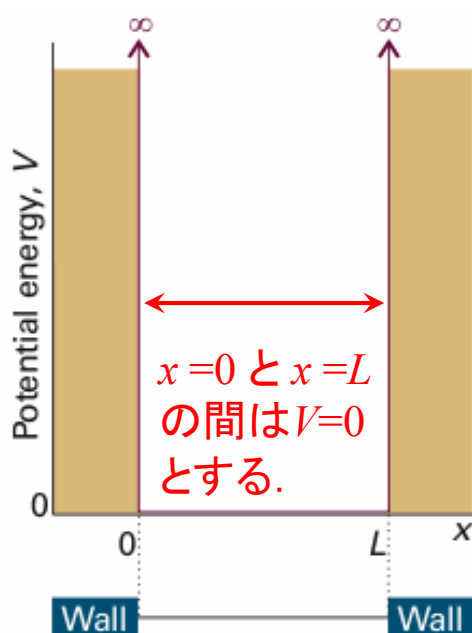
分子は、分子全体の「並進」運動および「回転」運動のほか、化学結合長や結合角の「振動」運動を持っている。これらを量子力学的に取り扱うことによって、波動関数とそのエネルギーを導く。この過程で自然に量子化が現れてくる。



4

## 9・1 箱の中の粒子(a particle in a box)

図9・1のようなポテンシャルにしたがう自由粒子、すなわち1次元の箱の中の粒子の問題を量子力学的に取り扱う。



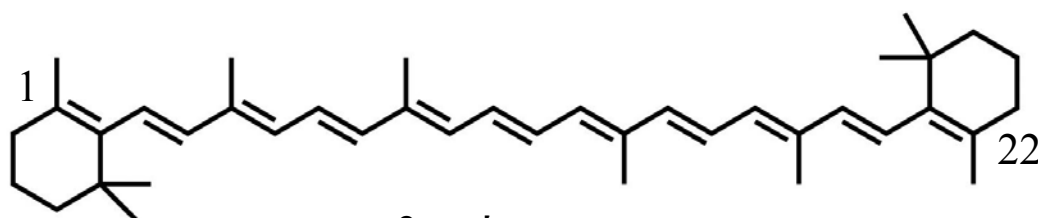
質量 $m$ の粒子は、 $x=0$  と  $x=L$  にある2つの無限の高さを持つ壁の間に閉じ込められている。簡単のために、この間のポテンシャルエネルギーはゼロとする。

図9・1 通り抜けることができない壁のある、1次元領域にある粒子。 $x=0$  と  $x=L$  の間でポテンシャルエネルギーはゼロとする。

5

「箱の中の粒子」の問題は何の役に立つのか？

291

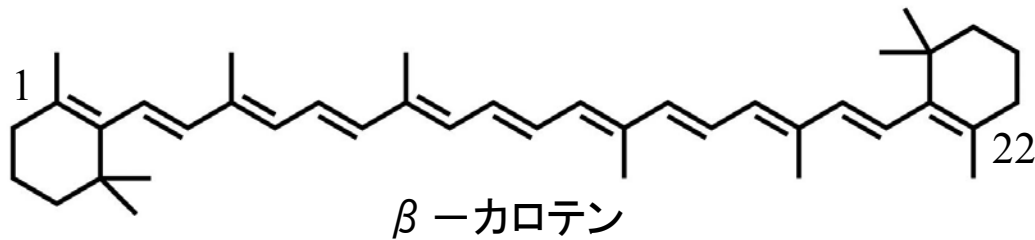


$\beta$ -カロテン

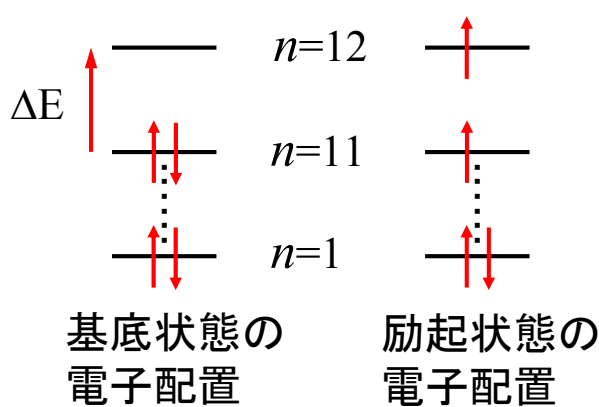
二重結合と単結合が交互に連なったポリエンでは、炭素原子の数が増えると、光の吸収極大が長波長側にずれてくる。炭素鎖が長くなると、青、緑、赤色の可視光を吸収するので色が着いて見える。

[数値例9・1]  $\beta$ -カロテンは直線形のポリエンで、22個の炭素原子鎖に沿って10個の単結合と11個の二重結合が交互に存在する。22個の炭素原子が作る箱の中を自由に動くことができる電子が吸収する光の波長はいくらか。この問題は、 $\beta$ -カロテンが吸収する光の波長を計算することと同じである。

6



β-カロテンは直線形のポリエンで、22個の炭素原子鎖に沿って10個の単結合と11個の二重結合が交互に存在する。各CC結合長を140pmとすると、22個の炭素原子が作る箱の長さは2.94nmとなる。22個の炭素原子から1つずつのp電子がπ共役系に参加している。



「箱の中の粒子の問題」を適用すると、22個の電子は $n=11$ までのエネルギー準位を占めている。β-カロテンに光を当てると光のエネルギーを吸収して、 $n=11$ から $n=12$ の準位に遷移する。

$n=n$ と $n+1$ のエネルギー準位間のエネルギー差  $\Delta E$ は、

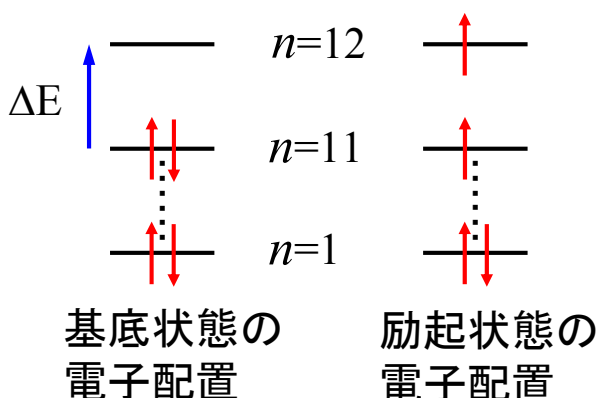
$$\begin{aligned} \Delta E &= E_{n+1} - E_n \\ &= \frac{(n+1)^2 h^2}{8mL^2} - \frac{n^2 h^2}{8mL^2} \\ &= (2n+1) \frac{h^2}{8mL^2} \quad (9 \cdot 7) \end{aligned}$$

C-C結合距離を約140pmとすると、β-カロテンの箱の距離 $L$ は、

$$\begin{aligned} L &= 140 \times 21 \text{ pm} \\ &= 2.94 \times 10^{-9} \text{ m} \end{aligned}$$

電子1個が $n=11$ から $n=12$ の準位に遷移するのに必要なエネルギーは(9・7)式を用いて次のように計算できる。

$$\begin{aligned} \Delta E &= E_{12} - E_{11} \\ &= (2 \times 11 + 1) \frac{h^2}{8mL^2} \\ &= \frac{23 \times (6.626 \times 10^{-34})^2}{8 \times (9.110 \times 10^{-31}) \times (2.94 \times 10^{-9})^2} \\ &= 1.60 \times 10^{-19} \text{ J} \end{aligned}$$



ボーアの振動数条件  $\Delta E = h\nu$

電子1個が $n=11$ から $n=12$ の準位に遷移するのに必要なエネルギーはボーアの振動数条件を用いて次のように計算できる。

$$\begin{aligned}\nu &= \frac{\Delta E}{h} \\ &= \frac{23h^2}{8mL^2} \times \frac{1}{h} \\ &= \frac{23h}{8mL^2} \\ &= \frac{23 \times (6.626 \times 10^{-34})}{8 \times (9.110 \times 10^{-31}) \times (2.94 \times 10^{-9})^2} \\ &= 2.42 \times 10^{14} \text{ s}^{-1} (\lambda = 1240 \text{ nm})\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}\lambda &= \frac{c}{\nu} = \frac{3.00 \times 10^8}{6.03 \times 10^{14}} \\ &= 4.98 \times 10^{-7} \text{ m} = 498 \text{ nm}\end{aligned}$$

実験値は  $\nu = 6.03 \times 10^{14} \text{ s}^{-1} (\lambda = 497 \text{ nm})$  であって、電磁波スペクトルの可視領域の光に相当する。青緑色の光を吸収し、赤色の光を反射するので、 $\beta$ -カロテンは赤色に見える。

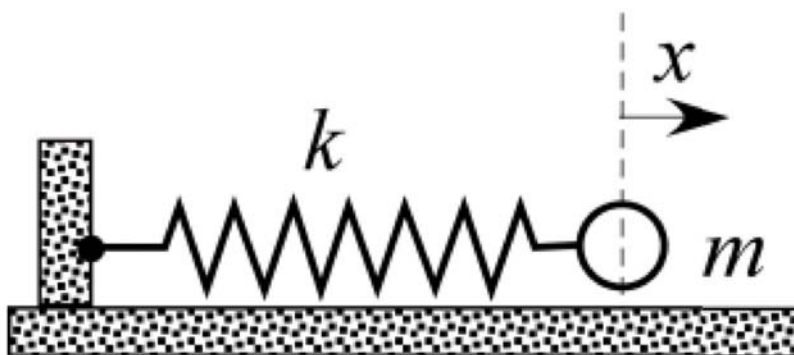
## ○振動運動

300

粒子が、その変位に比例する復元力、

$$F = -kx$$

を受けると、調和振動(harmonic motion)を行う。バネを $x$ だけ伸ばすと、伸ばした長さに比例してバネが縮まろうとする力が働く。 $k$ は力の定数である。



調和振動子

力 $F$ はポテンシャルエネルギー $V$ と、次の関係がある。

$$F = -\frac{dV}{dx}$$

したがって、調和運動の力 $F$ はポテンシャルエネルギー $V$ 、

$$V = \frac{1}{2} kx^2$$

に相当する。

シュレディンガー方程式は次のように書ける。

$$-\frac{\hbar^2}{2m} \frac{d^2\Psi}{dx^2} + \frac{1}{2} kx^2 \Psi = E\Psi \quad (9\cdot24)$$

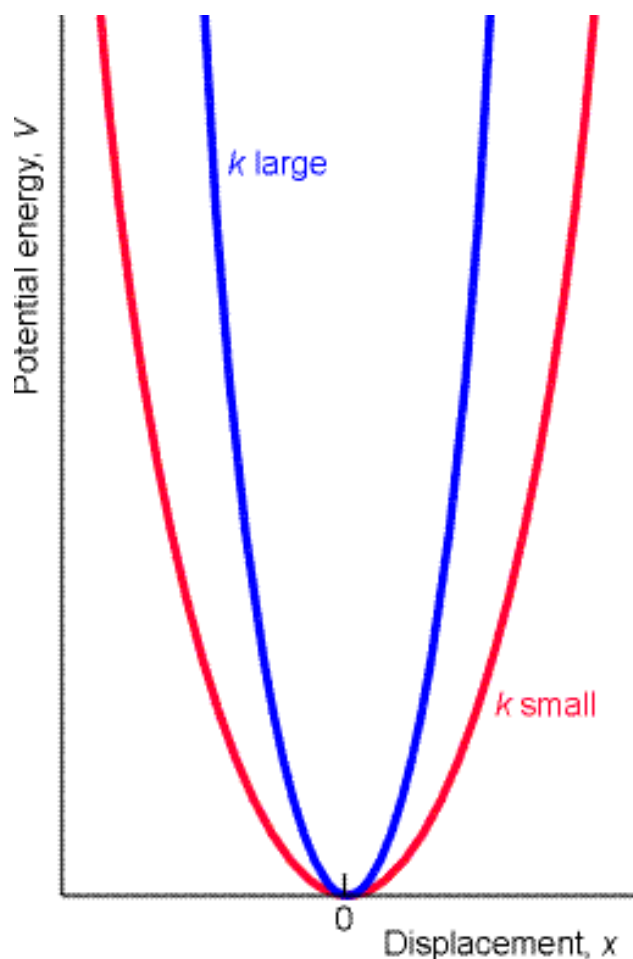


図13.27

調和振動子の放物線ポテンシャルエネルギー

$$V = \frac{1}{2} kx^2 .$$

ここで、 $x$  は平衡位置からの変位である。曲線の狭さは力の定数  $k$  に依存している。 $k$  が大きいと、同じ変位を起こさせるのに大きな力を加えなければならない(堅いバネ)。



## 9・4 エネルギー準位

## 9・5 波動関数

調和振動子のシュレディンガー方程式は、良く知られた微分方程式であり、その解は、

$$\Psi_v(x) = N_v H_v(y) e^{-\frac{y^2}{2}}$$

ここで、

$$y = \frac{x}{\alpha}, \quad \alpha = \left( \frac{\hbar^2}{mk} \right)^{\frac{1}{4}}$$

$H_v(y)$ はエルミート(Hermite)多項式と呼ばれている。

表9・1 エルミート多項式  $H_v(y)$

$v$	$H_v$
0	1
1	$2y$
2	$4y^2 - 2$
3	$8y^3 - 12y$
4	$16y^4 - 48y^2 + 12$

例えば、 $H_0(y) = 1$ であるから、調和振動子の基底状態 ( $v = 0$ ) (最低エネルギー状態) の波動関数は次式となる。

$$\Psi_0(x) = N_0 e^{-\frac{y^2}{2}} = N_0 e^{-\frac{x^2}{2\alpha^2}}$$

調和振動子に許されるエネルギー準位は

$$E_v = \left(v + \frac{1}{2}\right) \hbar\omega, \quad \omega = \left(\frac{k}{m}\right)^{\frac{1}{2}}, \quad v = 0, 1, 2, 3, \dots$$

である。隣り合う準位の間隔は

$$E_{v+1} - E_v = \hbar\omega$$

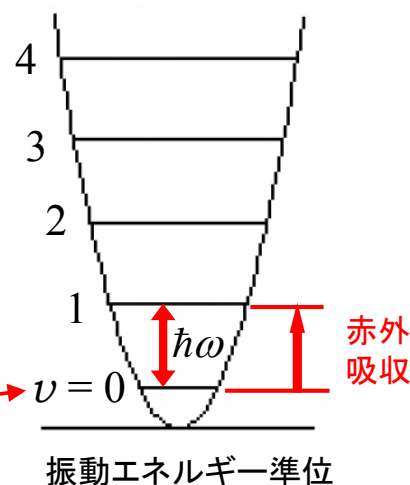
となり、すべての $v$ に対して同じである。

$v$ の許される最小値は0であるから、

調和振動子は**零点エネルギー**

$$E_0 = \frac{1}{2} \hbar\omega$$

を持つ。



- ① 振動エネルギー準位間隔は $\hbar\omega$ であり、一定である。
- ② 最低エネルギーは $(1/2) \hbar\omega$ であり、零点エネルギーがある。

## 二原子分子の調和振動子モデル

モデル: 分子 = ばねでつながった原子

$r$ : 核間距離、 $r_e$ : 平衡核間距離

$x$ : 変位 ( $x = r - r_e$ )、 $k_f$ : ばね定数

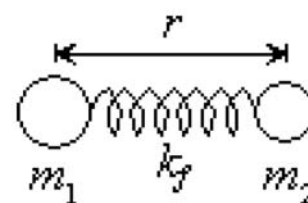


図 2.1 調和振動子モデル

ポテンシャルエネルギー  $V(x) = \frac{1}{2} k_f x^2$

古典運動方程式  
( $f = ma$ )

$$\mu \frac{d^2 x}{dt^2} = -k_f x$$

$\mu$ : 換算質量 ( $m_1, m_2$ : 原子1, 2の質量)

$$\mu = \frac{m_1 m_2}{m_1 + m_2}$$

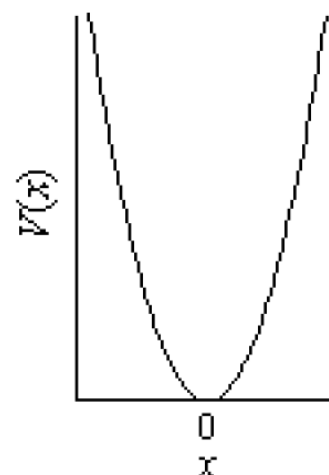


図 2.2 ポテンシャル 16



## 振動数

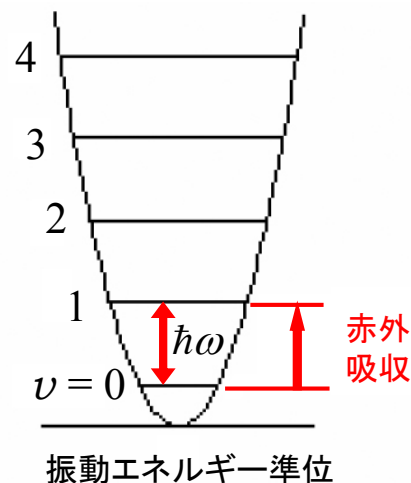
$$\nu = \frac{1}{2\pi} \sqrt{\frac{k_f}{\mu}}$$

## エネルギー準位

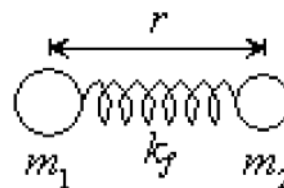
$$E_v = \left(v + \frac{1}{2}\right) h\nu, \quad v = 0, 1, 2, 3, \dots$$

二原子分子の赤外吸収,  $\text{cm}^{-1}$  ( $\mu\text{m}$ )

HCl	2886 (3.47)
NO	1876 (5.33)
CO	2143 (4.67)

ばね定数  $k_f$  [ $\text{N m}^{-1}$ ] と結合次数, 結合解離エネルギー  $D$  [ $\text{kJ mol}^{-1}$ ]

	$k_f$	結合次数	$D$
HBr	384	1	366
Cl <sub>2</sub>	318	1	243
O <sub>2</sub>	1139	2	498
NO	1548	2.5	632
CO	1855	3	1076
N <sub>2</sub>	2241	3	945



ばね定数が多いほど、堅いばねである。三重結合を持つ窒素分子 $\text{N}_2$ の $k_f$ は大きい。一方、塩素分子 $\text{Cl}_2$ の単結合は $k_f$ が小さく柔らかい結合である。

## 数値例9・3 分子振動の吸収振動数の計算

代表的なX-H型の化学結合の力の定数は $500\text{Nm}^{-1}$ くらいである。プロトンの質量はほぼ $1.7 \times 10^{-27}\text{kg}$ であるから(電子の質量は無視できる)

$$\omega = \sqrt{\frac{k}{m}} = \sqrt{\frac{500 \text{ kgms}^{-2}\text{m}^{-1}}{1.7 \times 10^{-27} \text{ kg}}} = 5.4 \times 10^{14} \text{ s}^{-1}$$

となり, 隣接準位間の間隔  $\Delta E$  は

$$\begin{aligned} \Delta E &= \hbar\omega = 1.05 \times 10^{-34} \text{ Js} \times 5.4 \times 10^{14} \text{ s}^{-1} \\ &= 5.7 \times 10^{-20} \text{ J} \\ &= \frac{5.7 \times 10^{-20} \text{ J}}{1.60 \times 10^{-19} \text{ JeV}^{-1}} = 0.36 \text{ eV} \end{aligned}$$

1モルあたりにすると,

$$\Delta E = \hbar\omega = 5.7 \times 10^{-20} \text{ J} \times 6.02 \times 10^{23} \text{ mol}^{-1} = 34 \text{ kJmol}^{-1}$$

結合の振動を一つの準位から直ぐ上の準位に励起するには, 振動数  $\nu$  が

$$\nu = \frac{\Delta E}{h} = \frac{5.7 \times 10^{-20} \text{ J}}{6.63 \times 10^{-34} \text{ Js}} = 8.6 \times 10^{13} \text{ s}^{-1}$$

したがって, 波長  $\lambda$  が

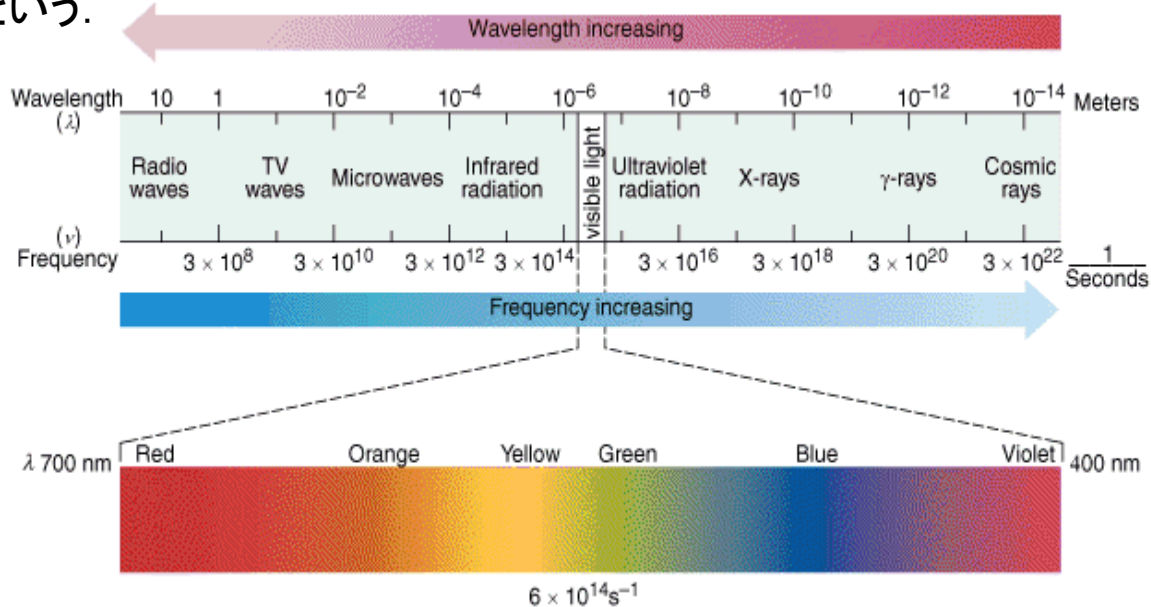
$$\lambda = \frac{c}{\nu} = \frac{3.0 \times 10^8 \text{ ms}^{-1}}{8.6 \times 10^{13} \text{ s}^{-1}} = 3.5 \times 10^{-6} \text{ m} = 3.5 \mu\text{m}$$

の電磁波が必要となる。したがって, 分子の隣接振動エネルギー準位間の遷移は赤外線で刺激され, あるいは赤外線を放出することになる。

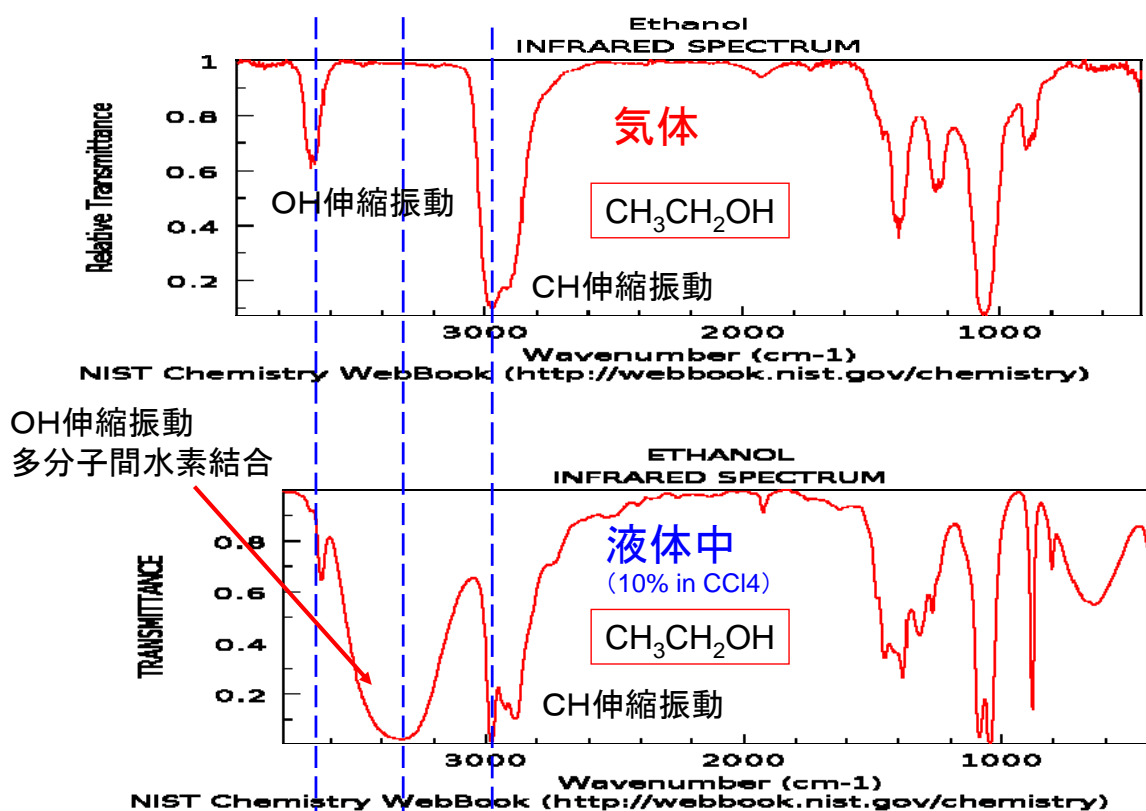
赤外線あるいは遠赤外線は, ヒトの目には感じられないが物質の振動エネルギー準位を励起させるので, 暖かく感じる。

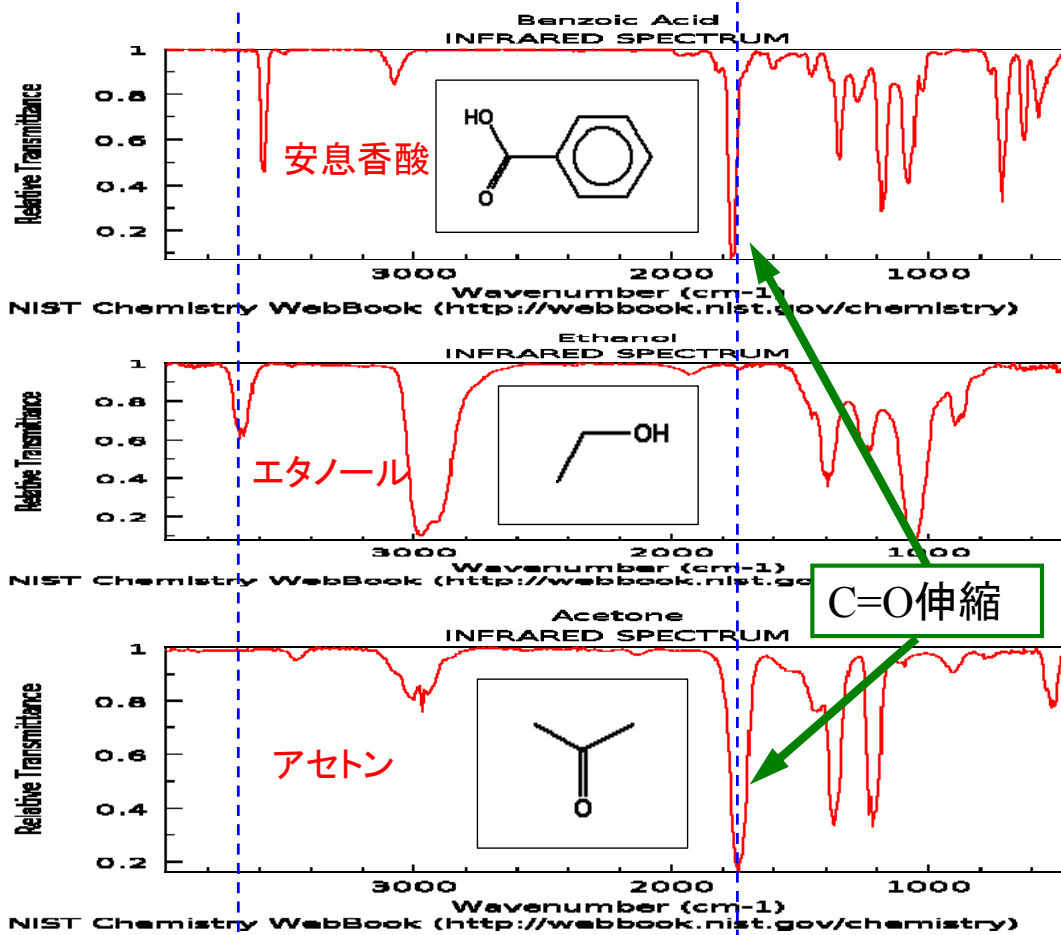
## 電磁波スペクトル

電磁波は、波長の短い、宇宙線、 $\gamma$ 線から、波長の長いマイクロ波、ラジオ波まで広く分布している。可視領域の電磁波を光という。



同じ分子でも、赤外吸収スペクトルは環境により変化を受ける





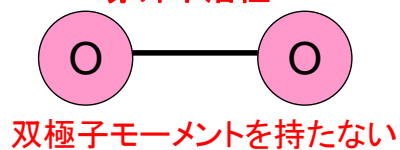
特性吸収帯の重ね合わせで表現できる

## 13・10 選択律

振動遷移が赤外線を吸収して遷移できるかどうか

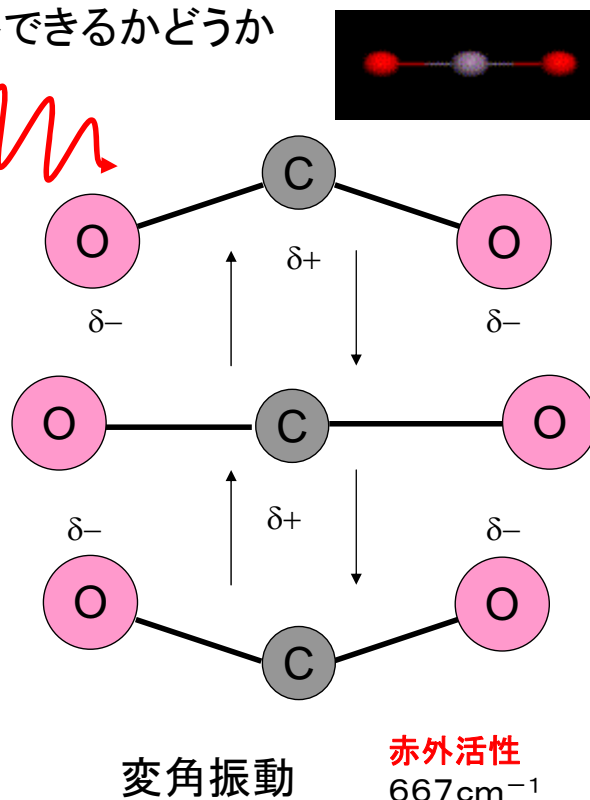
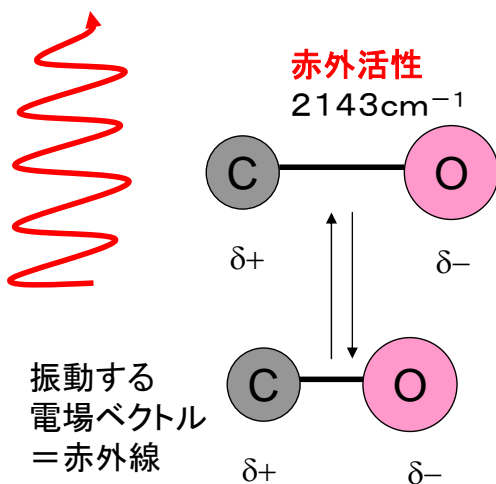
伸縮振動

赤外不活性



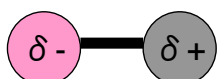
赤外活性

2143cm<sup>-1</sup>

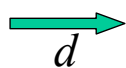


双極子モーメントが、ある基準振動により変化すれば、その基準振動は赤外活性

# 電気双極子モーメント $\mu$ と分極率 $\alpha$



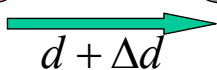
$$\mu = d\delta$$



電気双極子モーメントが振動によって変化する

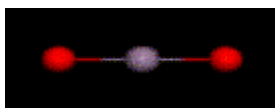


$$\mu = d\delta + \Delta d\delta$$



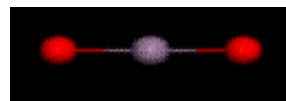
赤外活性

(対称伸縮振動)  
振動によって

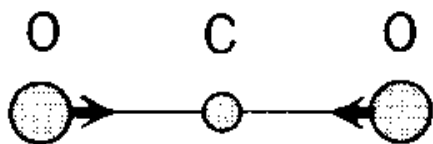


ラマン活性: 分極率  $\alpha$  が変化する.  
赤外不活性: 双極子モーメント  $\mu$  はない.

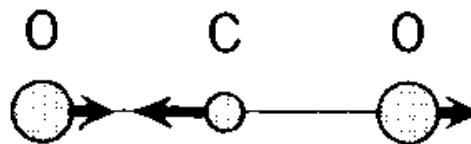
(逆対称伸縮振動)  
振動によって



ラマン不活性: 分極率  $\alpha$  は変化しない.  
赤外活性: 双極子モーメント  $\mu$  が変化する.

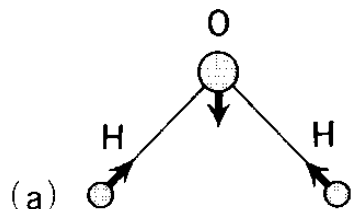


赤外不活性 ラマン活性

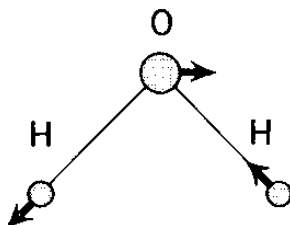


赤外活性 ラマン不活性

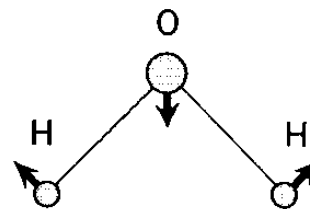
## 選択律の違い—赤外吸収とラマン散乱の使い分け



対称伸縮振動  
 $3657\text{cm}^{-1}$   
(赤外・ラマン)

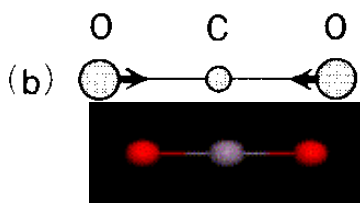


逆対称伸縮振動  
 $3756\text{cm}^{-1}$   
(赤外・ラマン)

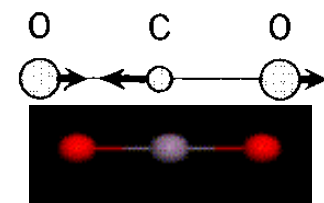


変角振動  
 $1595\text{cm}^{-1}$   
(赤外・ラマン)

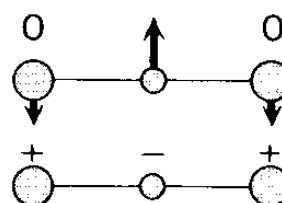
自由度
3x3
-3
-3
=3



対称伸縮振動  
 $1333\text{cm}^{-1}$   
(ラマン)



逆対称伸縮振動  
 $2349\text{cm}^{-1}$   
(赤外)



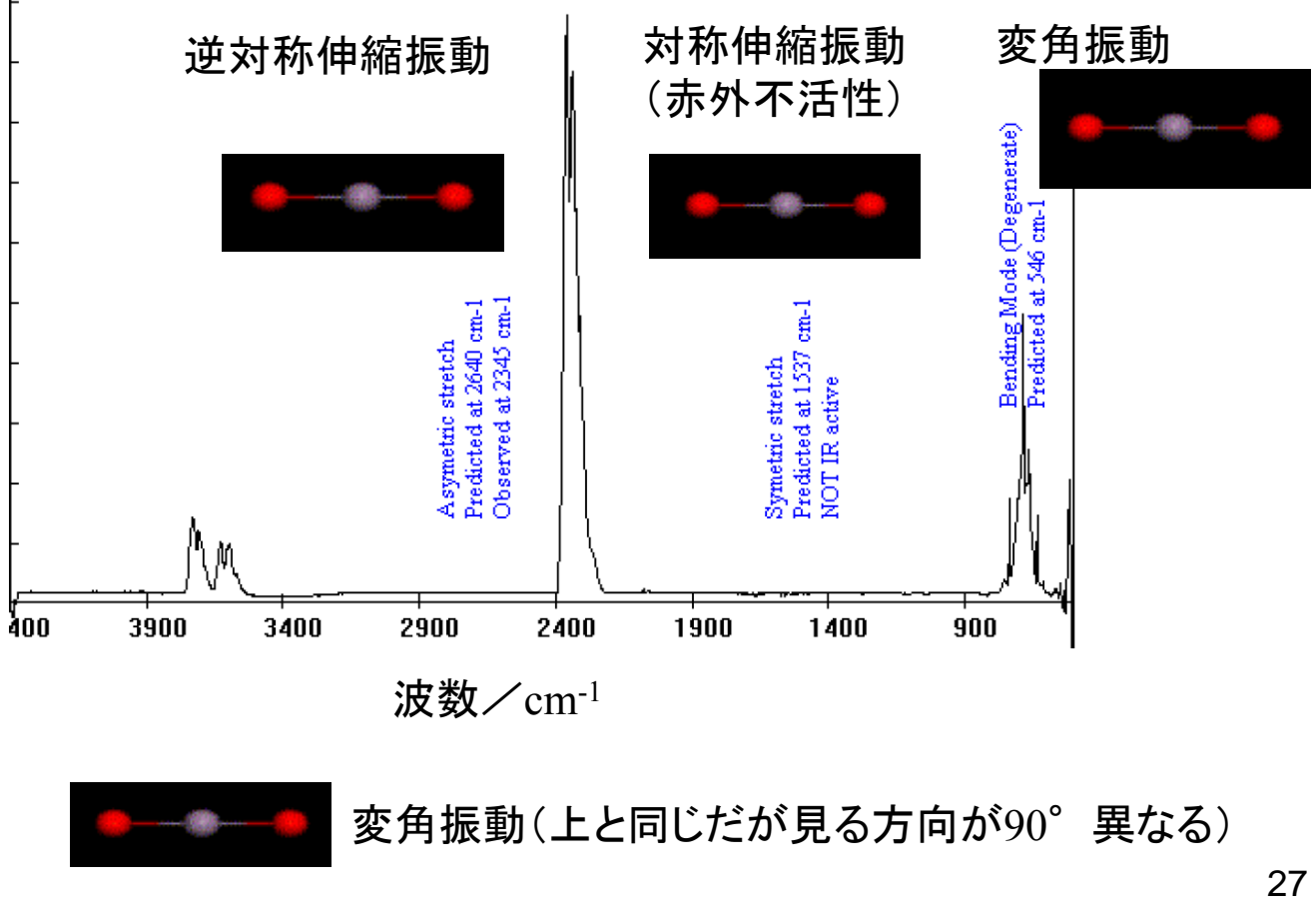
変角振動  
 $667\text{cm}^{-1}$   
(赤外)

自由度
3x3
-3
-2
=4

図 4・2 水(a)および二酸化炭素(b)の基準振動

# CO<sub>2</sub>のIRスペクトル

EX



# 回転運動と水素原子の電子の運動

EX

	半径 $r$	ポテンシャル エネルギー	波動関数 $\psi(r, \theta, \phi)$		
			動径部分 $R_{n,l}(r)$	角度部分 $Y_{l,m}(\theta, \phi)$	
				$\Theta(\theta)$	$\Phi(\phi)$
平面(円)上の 2次元回転運動	一定	ゼロ			$e^{\pm im_l \phi}$
球面上の 3次元回転運動	一定	ゼロ			
水素原子の 電子の運動	変数	クーロン引力 $V = -\frac{Ze^2}{4\pi\epsilon_0 r}$	$(\frac{\rho}{n})^l L_{n,l} e^{-\frac{\rho}{2n}}$	$P_l^{ m_l }(\cos \theta)$	

$Y_{l,m}(\theta, \phi)$  : 球面調和関数

$L_{n,l}$  : ラゲール多項式

$P_l^{|m_l|}(\cos \theta)$  : ルジャンドル多項式

$n = 1, 2, 3, \dots$

$l = 0, 1, 2, \dots, n-1$

$m_l = -l, -l+1, \dots, l-1, l$

28

## 二原子分子の剛体回転子モデル

(詳細については「13章分子分光学」参照)

モデル: 分子 = 棒でつながった原子

$m_1, m_2$ : 原子1, 2の質量

二原子分子の慣性モーメント

$$I = \mu r^2$$

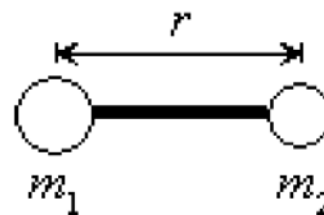


図 3.1 剛体回転子モデル

古典回転エネルギーと角運動量

$$E = \frac{1}{2} I \omega_x^2 + \frac{1}{2} I \omega_y^2 = \frac{J^2}{2I}$$

$$J^2 = J_x^2 + J_y^2 = (I \omega_x)^2 + (I \omega_y)^2$$

直線分子 = 二次元回転子

## 三次元の回転運動

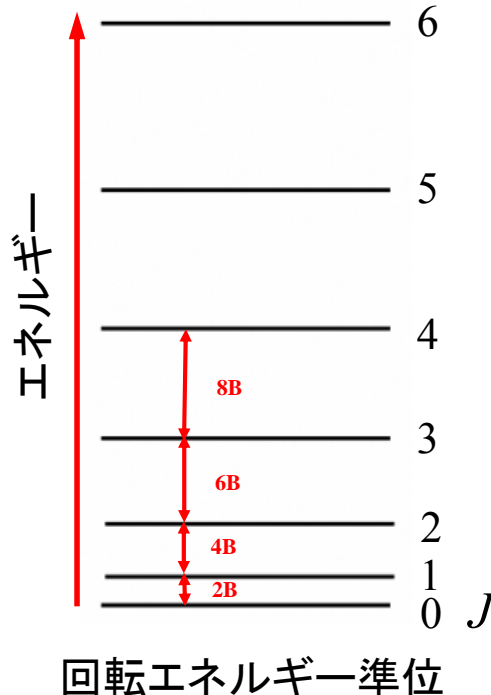
エネルギー準位と多重度

$$E = J(J+1) \frac{\hbar^2}{2I}, \quad J = 0, 1, 2, \dots$$

多重度  $g_J = 2J + 1$

$J$ の与えられた値に対して,  $m_J$ の許される値が $2J+1$ 個ある。すなわち, 各エネルギー準位の多重度は $2J+1$ である。

回転エネルギー準位間隔は,  $2B(J+1)$ であり,  $J \rightarrow J+1$ の遷移で $J=0$ のとき $2B$ ,  $J=1$ のとき $4B$ ,  $J=2$ のとき $6B$ である。



回転エネルギー準位

- ① 回転エネルギー準位間隔は,  $2B(J+1)$ であり, 一定ではない。
- ② 吸収線の間隔は $2B$ であり, 一定間隔である。
- ③ 最低エネルギーはゼロであり, ゼロ点エネルギーはない。

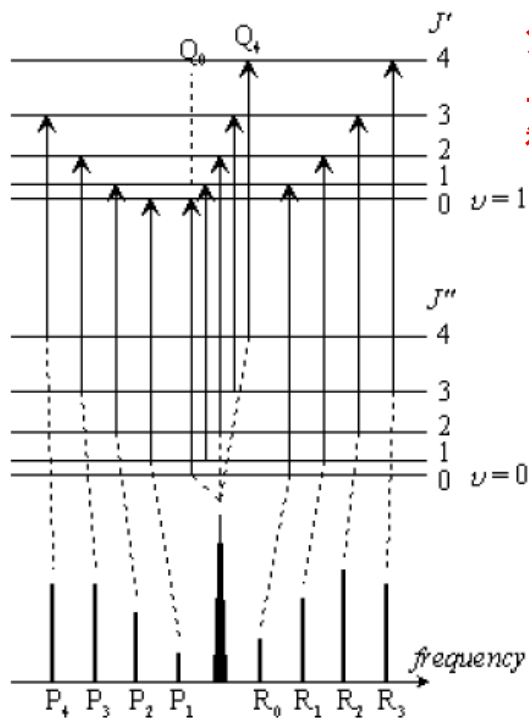
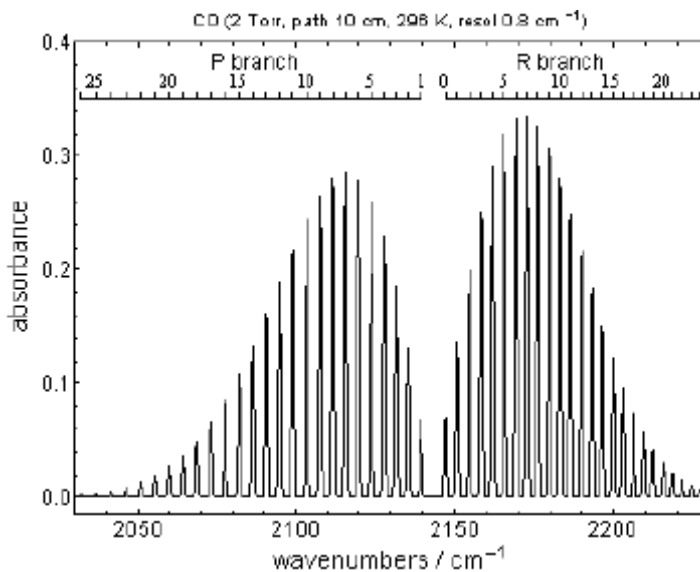


図 3.10 スペクトル枝

二原子分子の振動回転  
エネルギー準位

分子の振動と回転は同時に起こるので、  
二原子分子では振動回転スペクトルが  
観測される。



COの振動回転スペクトル

剛体回転子の問題は、分子の回転スペクトルから、原子の質量や結合長を決定するときに応用できる。

$$E_J = J(J+1) \frac{\hbar^2}{2I}, \quad J = 0, 1, 2, \dots$$

$$\Delta E_{J \leftarrow J-1} = E_J - E_{J-1} = hc2B(J+1)$$

$$\Delta E_{J+1 \leftarrow J} = E_{J+1} - E_J = hc2BJ$$

$$\therefore \Delta(\Delta E) = \Delta E_{J \leftarrow J-1} - \Delta E_{J+1 \leftarrow J} = hc2B$$

$$\Delta(\Delta \tilde{\nu}) = 2B$$

回転定数  $B$

$$hcB = \frac{\hbar^2}{2I}$$

$$\therefore B = \frac{\hbar}{4\pi I}$$

$$\Delta E = h\nu$$

$$\frac{\Delta E}{hc} = \frac{h\nu}{hc} = \frac{\nu}{c} = \frac{1}{\lambda} = \tilde{\nu}$$

回転スペクトルの吸収線は等間隔(2B)である。



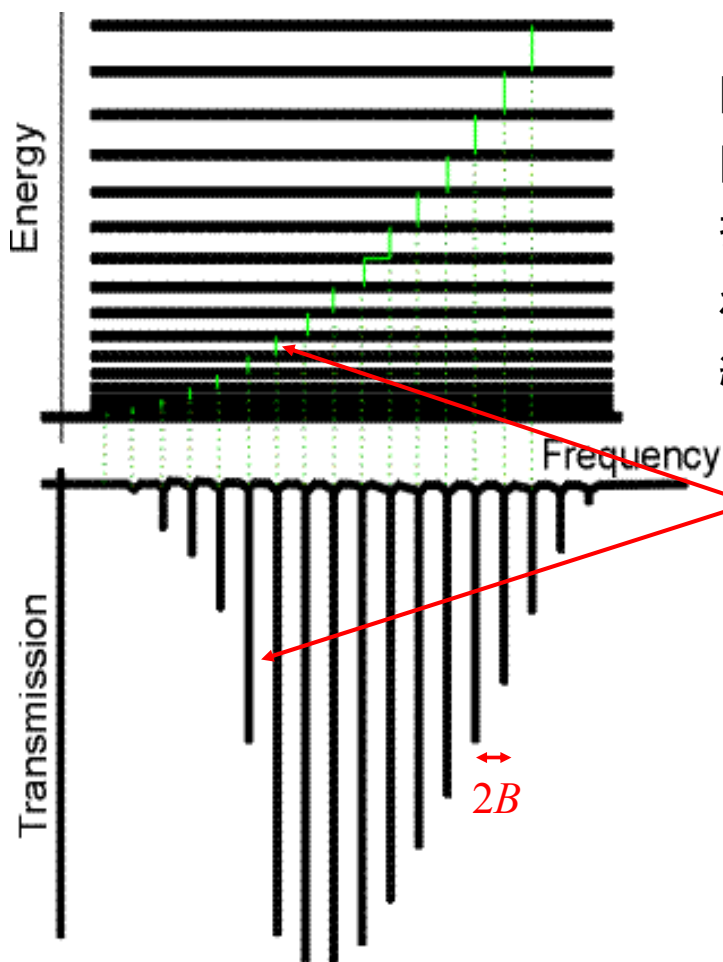


図13・19 直線回転子の  
回転エネルギー準位と、選  
択律  $\Delta J = \pm 1$  によって許さ  
れる遷移, および代表的な  
純回転スペクトル.

エネルギー準位が高くなるに連  
れて, 占拠数は指数関数的に  
減少するはずだが途中まで強  
度が増大している. 回転準位  
の場合は各準位の多重度は  $2J+1$   
である. 高いエネルギー準位  
ほど多重度が増すので, 収容で  
きる粒子の数は増えるので, 吸  
収強度はどこかで極大になり,  
その後は単調に減少する.

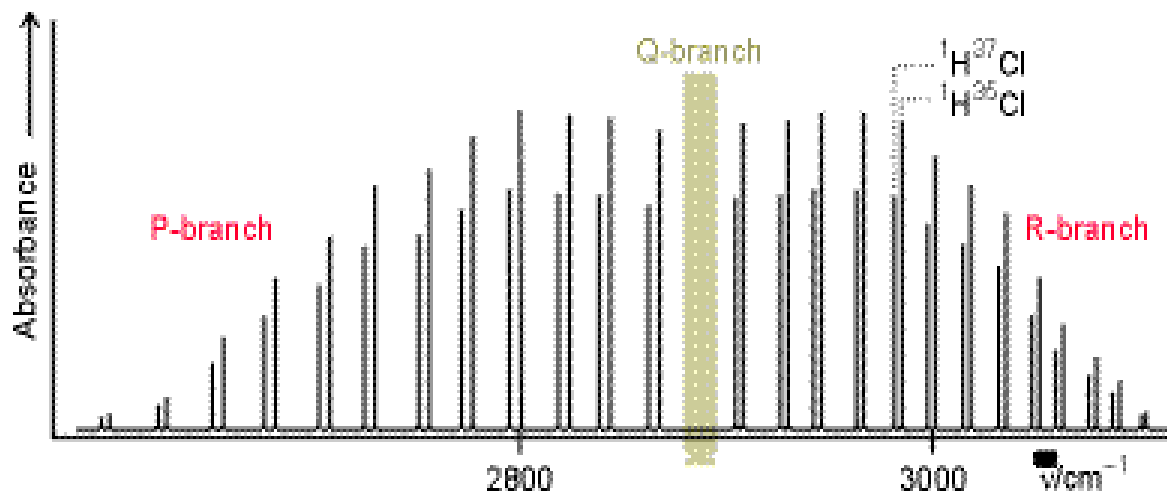
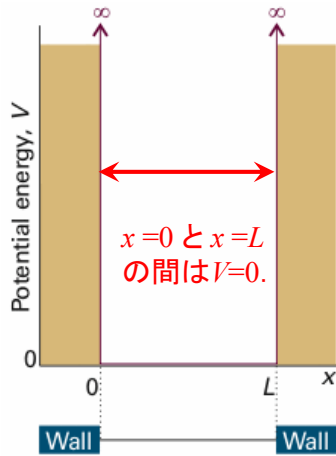
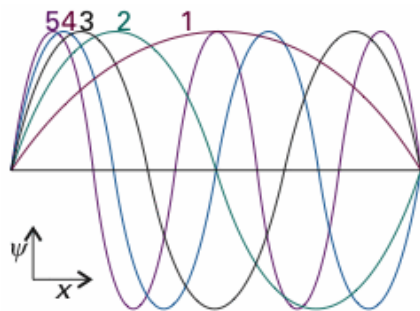


図13・34 HClの高分解能振動回転スペクトル.  $\text{H}^{35}\text{Cl}$ と $\text{H}^{37}\text{Cl}$   
の両方が寄与するので(天然存在比は3:1である), 吸収線は対  
になって現れる.

本日のポイント(1) 箱の中の粒子(a particle in a box)の問題 287



箱の中の粒子のポテンシャルエネルギー



箱の中の粒子の最初の5つの規格化した波動関数

○解の性質

$$\Psi_n(x) = \left(\frac{2}{L}\right)^{1/2} \sin\left(\frac{n\pi x}{L}\right), \quad n=1,2,\dots$$

$$E_n = \frac{n^2 h^2}{8mL^2}$$

箱の中の粒子の波動関数  $\psi_n$  は、

- (1) 定在波である。 → 量子化
- (2)  $n-1$  個の節(node)を持つ
- (3) ゼロ点エネルギーを持つ

$$E_1 = \frac{h^2}{8mL^2}$$

(粒子のとり得る最低エネルギーはゼロではない)

本日のポイント(2)

調和振動子に許されるエネルギー準位は

$$E_v = \left(v + \frac{1}{2}\right) \hbar\omega, \quad \omega = \left(\frac{k}{m}\right)^{1/2}, \quad v = 0, 1, 2, 3, \dots$$

である。隣り合う準位の間隔は

$$E_{v+1} - E_v = \hbar\omega$$

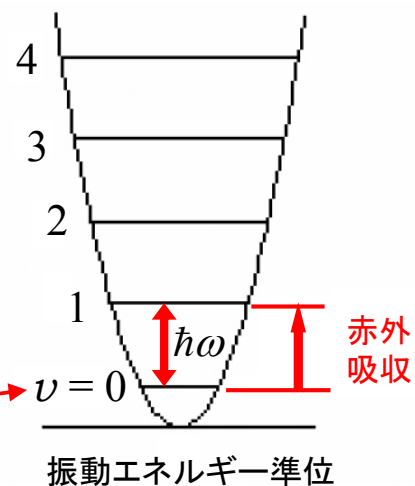
となり、すべての  $v$  に対して同じである。

$v$  の許される最小値は0であるから、

調和振動子は**零点エネルギー**

を持つ。

$$E_0 = \frac{1}{2} \hbar\omega$$



- ① 振動エネルギー準位間隔は  $\hbar\omega$  であり、一定である。
- ② 最低エネルギーは  $(1/2) \hbar\omega$  であり、零点エネルギーがある。

本日のポイント(3)

468

三次元の回転運動

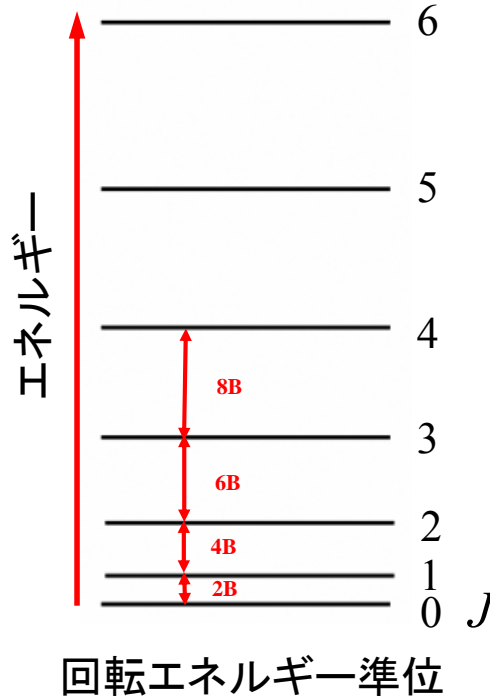
エネルギー準位と多重度

$$E = J(J+1)\frac{\hbar^2}{2I}, \quad J = 0, 1, 2, \dots$$

多重度  $g_J = 2J + 1$

$J$ の与えられた値に対して、 $m_J$ の許される値が $2J + 1$ 個ある。すなわち、各エネルギー準位の多重度は $2J + 1$ である。

回転エネルギー準位間隔は、 $2B(J+1)$ であり、 $J \rightarrow J+1$ の遷移で $J=0$ のとき $2B$ 、 $J=1$ のとき $4B$ 、 $J=2$ のとき $6B$ である。



- ① 回転エネルギー準位間隔は、 $2B(J+1)$ であり、一定ではない。
- ② 吸収線の間隔は $2B$ であり、一定間隔である。
- ③ 最低エネルギーはゼロであり、ゼロ点エネルギーはない。

37

本日のポイント(4)

EX

回転運動と水素原子の電子の運動

	半径 $r$	ポテンシャル エネルギー	波動関数 $\psi(r, \theta, \phi)$		
			動径部分 $R_{n,l}(r)$	角度部分 $Y_{l,m}(\theta, \phi)$	
				$\Theta(\theta)$	$\Phi(\phi)$
平面(円)上の 2次元回転運動	一定	ゼロ			
球面上の 3次元回転運動	一定	ゼロ			$e^{\pm im_l \phi}$
水素原子の 電子の運動	変数	クーロン引力 $V = -\frac{Ze^2}{4\pi\epsilon_0 r}$	$(\frac{\rho}{n})^l L_{n,l} e^{-\frac{\rho}{2n}}$	$P_l^{ m_l }(\cos \theta)$	

$Y_{l,m}(\theta, \phi)$  : 球面調和関数

$n = 1, 2, 3, \dots$

$L_{n,l}$  : ラゲール多項式

$l = 0, 1, 2, \dots, n-1$

$P_l^{|m_l|}(\cos \theta)$  : ルジャンドル多項式

$m_l = -l, -l+1, \dots, l-1, l$

38

## 第9章

□1 自由な粒子の波動関数は  $\Psi = Ae^{ikx} + Be^{-ikx}$  であって、  
 $E = k^2\hbar^2/2m$  である。

□2 長さLの一次元の箱の中の粒子の波動関数とエネルギーは、

それぞれ  $\Psi_n(x) = \left(\frac{2}{L}\right)^{1/2} \sin\left(\frac{n\pi x}{L}\right), \quad n=1,2,\dots, \quad E_n = \frac{n^2\hbar^2}{8mL^2}$

である。ゼロ点エネルギー、つまり許される最低のエネルギーは

$E_1 = \frac{\hbar^2}{8mL^2}$  である。

□3 対応原理とは、量子力学で大きな量子数に到達すると古典力学が現れてくる、という原理である。

□8 調和運動とは、変位に比例する復元力、 $F = -kx$ の存在のもとでの運動である。ここで、 $k$ は力の定数である。その結果、

$V = (1/2)kx^2$ となる。

□9 量子力学的な調和振動子の波動関数とエネルギーは、それぞれ(9・28)式と(9・25)式に与えられている。

$$\Psi_v(x) = N_v H_v(y) e^{-\frac{y^2}{2}} \quad y = \frac{x}{\alpha}, \quad \alpha = \left(\frac{\hbar^2}{mk}\right)^{\frac{1}{4}} \quad (9 \cdot 28)$$

$$E_v = \left(v + \frac{1}{2}\right)\hbar\omega, \quad \omega = \left(\frac{k}{m}\right)^{\frac{1}{2}}, \quad v = 0, 1, 2, 3, \dots \quad (9 \cdot 25)$$

5月20日, 学生番号, 氏名

(1) (応用問題: 生物学とナノテクノロジー) 9・31 (p329)

$\beta$ -カロテンが生体内で酸化されると、2つに割れて、2個のレチナール(ビタミンA)を形成するが、これは視覚を引き起こす色素の前駆体である。レチナールの共役系は、C原子11個とO原子1個からなる。レチナールの基底状態では、 $n=6$ までの各準位は2個の電子で占められている。平均の原子核間距離を140pmと仮定し、次の計算をせよ。(トランス型レチナールの  $\lambda_{\max} \approx 370\text{nm}$ )

(a) 基底状態と1個の電子が $n=7$ の準位を占める第1励起状態の間のエネルギー間隔  $\Delta E$

(b) これらの2つの状態の間の遷移を起こすのに必要な電磁波の振動数。

(2) 本日の授業についての意見, 感想, 苦情, 改善提案などを書いてください。

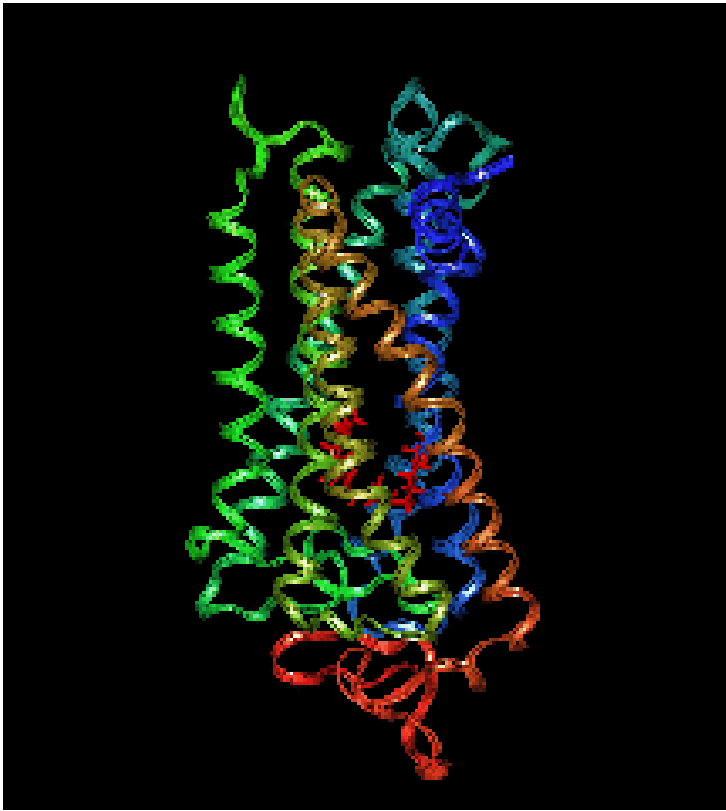
41

## ○視覚

目が光を感じるのは、網膜にある棒状の細胞に含まれている**ロドプシン**(視紅)という赤いタンパク質が光によって反応するからである。網膜には**錐体細胞**と**桿体細胞**の2種類の視細胞があり、これらの感覚細胞で光刺激を受容する。

ロドプシンは**レチナール**という分子が**オプシン**というタンパク質に結合したものである。

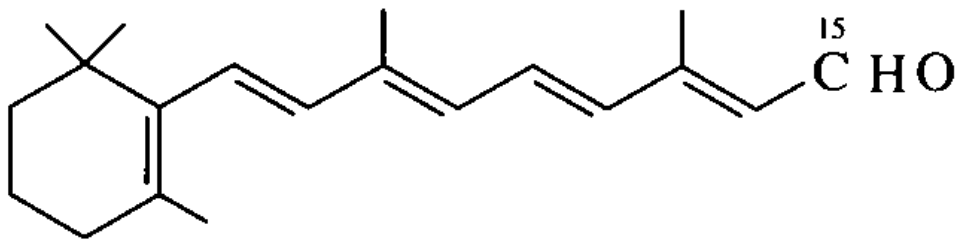




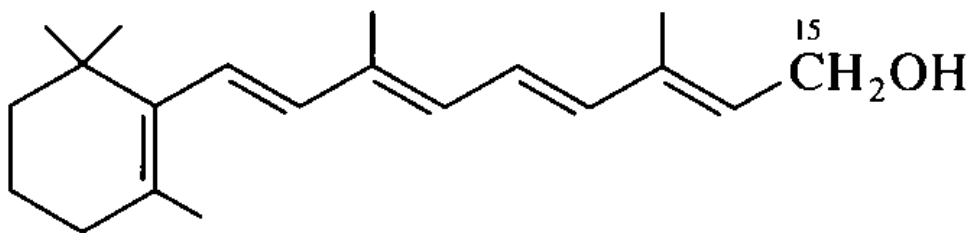
左の図がロドプシンの立体構造(X線結晶構造解析より:分解能2.8Å)。

アミノ酸連鎖のペプチド鎖をリボン状に表現しています。ロドプシンの純粋なタンパク質部分(オプシン)は7本の $\alpha$ ヘリックス(螺旋)と、そのヘリックス間のループで形作られています。

中央の赤い物質がレチナールです。7番目のヘリックスの296番目のアミノ酸(リジン残基)と共有結合しています。

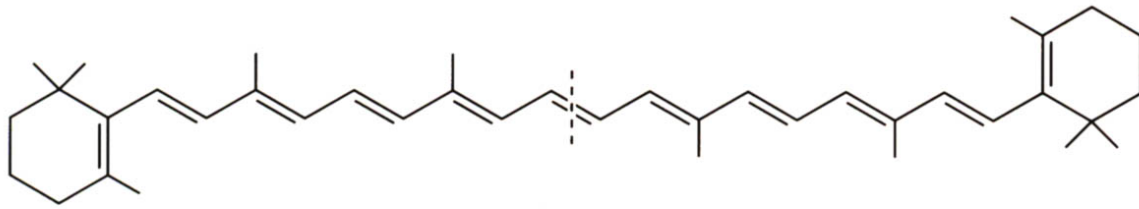


レチナール



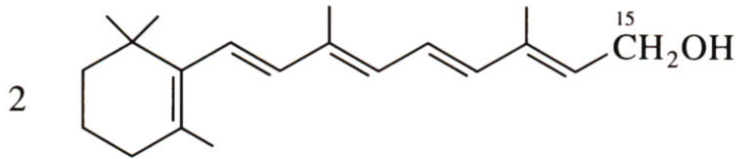
ビタミン A  
(レチノール型)

ビタミンAの不足によって夜盲症が起こる。



β-カロテン

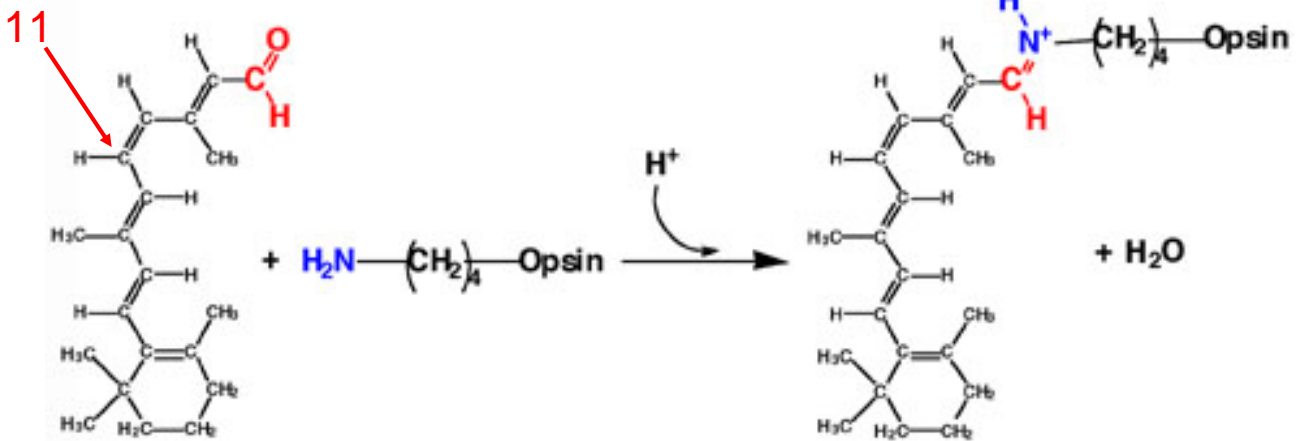
酸化的切断



ビタミン A  
(レチノール型)

図 7・27 β-カロテンからの  
ビタミン A の生成

ビタミンAはβ-カロチンのようなカロチノイドから生合成される。



11-シス-レチナール

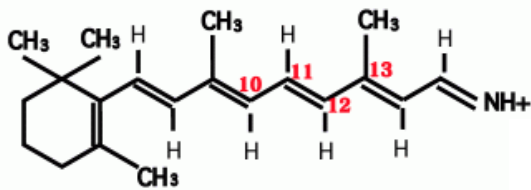
ロドプシン

レチナールはオプシンの296番目のリジン残基  
と共有結合(シッフ塩基を形成)している。



光異性化

光



ロドプシンに光が当たると二重結合部分が回転し、cis-からtrans-に変化(光異性化)する。そして、trans-体はオプシンから離れていく。これが刺激となって視神経に情報が送られ、脳に光として感じられる。